

価値創造モデルの提示とサステナビリティを  
意識した掲載情報の特定

今年度の東海理化レポートにおいて注目すべき点は、価値創造モデルを示していることです。東海理化の経営理念やさまざまな製品開発が社会のどのような要請・課題に基づくものか、またそこから展開された製品が社会にどのような価値を提供しているのかについて、理解しやすくなっています。また、社長メッセージと併記することで価値創造の詳細部分も読み取れる構成になっており評価できます。

次年度以降は、中長期的なビジョンや目標の達成度を示すことも有効です。環境活動については詳細に報告されていますが、その他の非財務KPIについても定量化することで戦略の進捗状況が伝わりやすくなると思います。さらに今回はSDGs(持続可能な開発目標)などを念頭に掲載情報が特定された点も新しい姿勢だと考えています。今後は各課題の活動がどの目標に関連し貢献しているのかを具体化されることを期待しています。

社会に役立つ製品開発とモチベーションを  
重視した人材育成

最も印象的な製品は世界で初めて量産車に搭載された「デジタルアウトミラー」です。東海理化はその筐体部を担当し、小型・軽量で優れた空力特性により、燃費性能向上に貢献し、また、カメラ部の視認性確保のために、さまざまな工夫を凝らしたことにより、客先表彰を受けました。改めてこの製品から快適・安心・安全な社会を実現するために新しい技術開発が継続されていることを実感しました。一方で、一般にはこの製品について知らない方も多いです。製品の詳細を紹介することによって幅広いステークホルダーに革新性が伝わる



と思います。

また、革新的なものづくりを実現する環境は、さまざまな人材育成の取り組みによって培われていると考えられます。例えば、東海理化化学園においては単に技術を身につけるだけではなく、チャレンジマインドを核として技術向上をめざす高いモチベーションを持った人材を育成しています。社内の有能な技術者が愛知県など社外からも表彰されていることから、人材育成の取り組みは高い水準にあると言えます。

環境負荷低減のための計画的な取り組み

環境活動報告において特徴的だったのは、2050年のCO<sub>2</sub>低減目標に向けて2030年の中期目標を掲げた点です。脱炭素社会に向けた計画がより鮮明になり、こうした取り組みへの積極性が感じられました。活動概要においても、項目ごとの実施事項と実績が定性的にも定量的にも明記され、進捗状況を詳細に理解することができます。

今年度の取り組みでは、再生可能エネルギーの国内導入が計画されていること、廃プラスチックのリサイクル化が推進されていること、半導体工程において排水が再利用されていることなど、多くの資源を循環させて廃棄を低減させる報告が印象的でした。可能な限り自社で資源を有効に活用し、リサイクルを促進させることは、不安定な社会情勢に左右されずに安定的に事業を支えていくことに繋がります。引き続き、環境負荷の低減をめざした多くの活動に積極的に取り組まれることを期待します。



愛知淑徳大学 人間情報学部  
高原 美和 准教授

愛知淑徳大学人間情報学部准教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了後、株式会社豊田中央研究所客員研究員、愛知淑徳大学人間情報学部講師などを経て、2016年4月より現職。博士(人間科学)。認知機能の加齢変化に関する研究や、高齢ドライバーの運転行動を分析し背景要因を検証する研究を行っている。

第三者意見を受けて

高原先生には2017年より継続してご意見をいただき、大変感謝致します。

今回は特集ページにある対談におきましても、当社の技術開発の取り組みに対して、貴重なご意見をいただきましたことに、あらためてお礼申し上げます。自動運転、電動化、コネクティッド、カーシェアリングなどの新技術によるクルマの変化や社会の変化に対応すべくより高いレベルの「快適・安心・安全」を提供する次世代製品の開発に注力してまいります。

また、人材の育成・確保と労働の質向上のため、社員の働き方改革を進めてまいります。さらに環境面につきましても2050年にCO<sub>2</sub>排出量を半減するという目標に向けて、今後も計画的に取り組んでまいります。

高原先生にご指摘いただきました「非財務KPIの定量化」や「新製品の詳細紹介」などを含め、今後も社会やステークホルダーの皆様当社のさまざまな取り組みを具体的に判りやすくお伝えするとともに、社会に新たな価値を提供することで、より信頼とご期待をいただけるよう尽力してまいります。



取締役/常務執行役員  
総務部・人事部・経理部 統括  
西田 裕